やっぱり死神なら黒棺したいよね

モコモコもこたん

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

死ぬ直前までＢＬＥＡＣＨを読んで、転生したら地獄の死神だったのでソウルソサエティを目指したり、黒棺習得を目指したりすることにした。

但し、転生先の世界は…

ＢＬＥＡＣＨ要素はオリ主以外ないです

目　次

オサレっていいな ―――――――――――――― 1
鬼道ってイナズマイレブンのキャラにいたよね ―――――――― 5
怪談レストランと花子さんが来たって今でも通じたらいいな ―― 8
過去編の平和とテスト前の勉強してないは信じない ―――――― 13

オサレっていいな

転生をした。
神様には会うことはなかったけど、テンプレ的に死んだと思ったら地獄にいた。
普通に地獄に落とされたのかと思ったら今の自分は地獄の死神らしい。自分が最後に読んでいた漫画がＢＬＥＡＣＨだったので、ここらへんから導き出される結論はそういうことなのであろう。
折角なので、目標はソウルソサエティに行ってみることと黒棺を出来るようになることにする。
原作ファンとしては、ソウルソサエティに行ってみたいのはもちろんのこと、あのヨン様こと藍染の代名詞とも言える個人的最オサレ鬼道の黒棺は、ＢＬＥＡＣＨに転生したオリ主の通過儀礼みたいなものであると思う。（偏見）
確か地獄については本編完結後の映画でやっていたと思うが、あいにく見ていないので原作知識はほぼ活かせないのは残念だけど、逆に言えば失言や地獄なら居るであろう閻魔大王に嘘をつく危険性がなくなったとも言えるのでがんばっていこうと思う。

数ヶ月が経過した。
仕事が多目なのはきついけど、やりがいはあるし何よりも同僚が美人で上司が可愛いのは有難い。ちなみに上司は閻魔大王らしくてそれを知ったときは驚いたけど、それよりも自分以上に働いててい つ休みを取っているのか不安になった。
同僚が美人なのと上司が可愛いのと休みもちゃんとあるので、お盆が忙しすぎるのを除けば問題点のない最高の職場といえるのではなかろうか。
問題があるとするならば、誰もソウルソサエティのことを教えてくれないことぐらいか。上司に聞くわけにもいかないので推測になるが、あまり両世界の仲が良くなく、下っ端には知らされていないのかもしれない。原作でも、地獄は序盤に一回出てきてからそれ以降全然

語られてないので、変な地雷を踏むのを避けるために独自で鬼道を開発しようと思う。
「というわけで、鬼道をしたいんだけど何か良い案ない？」
「また急に変なことを言い出したね。確か鬼道ってシャーマン辺りが使う術だろ」
　同僚である小野塚小町さんに聞いても、常識的なことしか返ってこなく、死神の鬼道のことを知ることが出来なかった。
　顔の広い小町さんですら、知らないならばもはや存在しないんじゃないかとさえ思えてくる。
　小町さんはかなりの美人で、サボり癖を除けばかなりの常識人だが、いつも仕事を押し付けてくるのでそこら辺は死神だと思う。自分も死神だけど。
「また仕事の押し付けに来たんですか？」
　正直、来る理由の半分以上は仕事のサボり関連なんじゃないかと思っている。
「押し付けじゃないよ。仕事（この子）があんたのところに行きたがっているのさ」
　どこかの決闘王（デュエルキング）みたいなことを言ってくる。
　毎日毎日仕事をサボろうとしてるが、それでも最低限の仕事をやってはいるのと、もう一つの理由で見逃されてるらしい。
「奇遇ですね。私も貴方のところに行きたがっていたのですよ」
「ゲッ、この声は…」
「またサボりですか、小町」
　この人は、四季映姫・ヤマザナドゥという上司で、映姫様と呼ばれている。見た目は可愛らしい少女だけど、実際はこの地獄の閻魔という凄い役職についている。
　さっき言ったもう一つの理由がよくサボっている小町さんに説教をしに来る映姫様の存在で、小町さんはよくこっちに来て雑談や仕事を押し付けてくるので、なし崩し的に映姫様とはよく顔を合わせている。
「こんにちは。また小町の説教に来たんですか？」

とりあえず、挨拶はしておく。この人はかなり忙しいのに毎回律儀に説教しに来るので、偉いと思う。
そこら辺の性格から閻魔になったのかなと個人的に思っている。
「こんにちは。また小町の仕事を肩代わりしようとしてるんですか」
言われてみると、ここ最近は小町さんの仕事もする前提で、スケジュールを組んでいた。
でも、そうしないと仕事が回らないからしょうがない。
「貴方は貴方で、小町の仕事を肩代わりし過ぎです。それによって小町がまたサボりをするんですよ。大体あなたは～～～」
今日は、こっちに説教が来るっぽい。皆は映姫様の説教を嫌がっているけど、言っていることは正しくてちゃんとこちらのことを思ってくれているのが伝わってくるし、何より映姫様はめちゃんこ可愛いので個人的にはオッケーだ。たまに長すぎる時はあるので歓迎ではないけども。
「話をちゃんと聞いているのですか」
「はい」
「それなら良いのですが、先程言った通り～～～」
そろそろ映姫様の説教に集中するとしよう。
って、小町さんがグッと指を立てながら去っていった。
美人って何をしても絵になるよね。
あの人、絶対後でさらに怒られるよな、それでも逃げるんだろうけど。
こんな感じの日常を日々過ごしている。
☆☆☆☆☆
私の名前は、小野塚小町
しがない死神さ。
最近あったことといえば、変な同僚が増えたことだね。そいつはよく仕事を肩代わりしてくれるが、ほぼ毎回分からないことを聞いてくるんだよね。
そうるそさえていだの、黒棺だの、くいんしいだのいろいろ意味不明なことを言ってはいるんだけど、それ以外は普通なのがどうにもち

ぐはぐでおかしいんだよね。
とりあえず映姫様が言うには白らしいので、監視とまではいかないけども観察対象にはなった。
実際に観察してみると、よく変なことを言うことを除けば普通に良い人だと思うし、何より仕事を代わりにやってくれるのは有難いね。
それに変なことを言ってはいるけど、常識はきちんとあって、礼儀もよくて仕事をちゃんとこなしてくれるので皆あまり気にしてないのも良いことだね。
そういえば、映姫様がいうにはあいつは謎の魂でどこから来たのかよく分かってないらしいんだよね。
まあ、悪いヤツじゃなさそうだから何でもいいか。
何よりも仕事を肩代わりしてくれるしね。

鬼道ってイナズマイレブンのキャラにいたよね

そもそもとして鬼道の知識が詠唱しか無いことに今さら気付いた。
正直鬼道とか言われても、原作での概念は序盤や回想に少し出てきただけで正直フレーバーテキストとしか思ってなかったからそこら辺りは流して読んでたから全然覚えてないし、何よりもあの某超次元サッカーに出てきたゴーグルかけてる方が頭に浮かんで集中できない。
原作で考えたとしてもたしか一護は鬼道を使ってないし、浦原さんやマユリ様は何らかの説明をよくしていたがそんな鬼道の前提をわざわざ語るようなキャラじゃないから想像もつかない。そうした細かいところはアニメでは語られてそうだが、アニメも未視聴なので結局分からん。
なんなら、まだ石田がやってたようなクインシーの修行の方法なら思い出せるが、クインシーは血を受け継いでないと使えないし、万が一それでクインシーに目覚めてしまうて千年血戦編に巻き込まれる危険がある。死神のクインシーというどっちのサイドにも付ける存在ということは、逆にどちらからも狙われる可能性があるので、もしそうなってしまうと生き残りが絶望的になるのでこの修行は没だな。
っと、思考が逸れすぎた。こうなったら、取れる手段はもはや一つしかない。
そう、ハンターハンターの念能力の修行しかない。
頭がおかしくなったと思われるかもしれないが、念能力の修行は厨二病なら通る道なので覚えているし、他の作品の修行はほとんどキツすぎたり大掛かりだったり実現不能だったりで、仕事を休まないと修行が出来ないのでこれしか出来る修行が思いつかない。
それに他にすることもないのでやるだけやってみることにする。
まずは、精孔を開けるために体内のエネルギーを感じるところから始まるので空いた時間に瞑想でもしてみよう。
〜〜数ヶ月後〜〜
何も変わらない。あったことと言えば映姫様に

「ようやく、ちゃんと休暇をとりましたね」
と言われ、恥ずかしさと申し訳なさが半々だったことがあったくらいだ。
主人公達の才能が凄すぎて忘れてたが、そもそも念は精孔を開くのに数年かかるものだったはずだ。
それもこんな中途半端にするのではなく、専念してそれでも数年だったはずだ。こんなペースじゃ十年かそれ以上の時間かかってしまうかもしれない。
それに加えて目覚めたとしても、あくまで入り口に着くだけでありそこから次の修行が始まるはずだ。
別にのんびりしても良いがあまり時間を掛け過ぎて、強くならないまま地獄篇が始まってしまうとその時点で死亡がほぼ確定してしまう。
地獄篇はたしかザエルアポロが出てくるらしいから、ザエルアポロが地獄に落ちたらその数年後が危険域になるはずだ。そう考えると猶予はありそうだが、出てくる敵は原作終了後の一護達と戦うやつらと考えると生き残れる気がしない。
こうなったら、もう一つの方法に頼るしかない。強引に精孔を開けてもらう方法だ。
そもそも、何で念能力の修行を始めたのかはあまり思い出せないがここまで来たら引くに引けない。強引に開けてもらうには念の攻撃を体に受けるしかないが、この世界に念能力者がいるとも思えないので妥協してエネルギーを込めた攻撃を食らおう。
「というわけで、俺にスペルカードを撃ってくれない？」
小町さんがポカンとした顔をこちらに向ける。
「理由が分からないけど、何でそうなったんだい？」
「小町さんしかこんなことを頼れる人が思いつかなかったんだ」
「状況さえ違ければ嬉しいかもしれないのにねぇ」
そう、最近になって弾幕ごっこというのが出来たのだ。そして、弾幕ごっこにはスペルカードが必要らしい。そして、ハンターハンターにもスペルカードは登場しており、スペルカードは念能力によって作

られたもののはず。これは偶然を超えてるとしか考えられない。偶然です

つまり、運命が俺を呼んでいるのだ。呼んでいません

乗るしかない、このビッグウェーブに。

「ほら、いつも仕事を代わりにやってるじゃん？」

「仕事をしてもらってさらに攻撃をすることを理解できないんだけど？」

確かに、側から見たら恩返しどころか恩を仇で返す行為にしか見えない所業ではある。

だけどここで引いても何も始まらない。

念能力を覚えたいという理由が知られても良いが、固有名詞を出しても伝わらないだろうから誤魔化して言ってどうにか納得してもらおう。

「小町さんの攻撃を食らうことで、新しい領域（念能力）にたどり着けそうな気がするんだよ」

「確かに、側から見ても新しい領域（ドＭ）にたどり着きそうな感じはしてるけどね」

小町さんが、俺の進化を感じとっている。

やはり時代が来ている。いつもより少し視線が冷たくなっている気がするがそこは恐らく俺のオーラを観察しているのだろう。そこまで分かるほどに目覚めかけてるなら別に瞑想で開いても良いが、ここまで来たら待ちきれない。

「分かってくれるなら１発お願い！」

「１回だけ、１回だけだから‼？」

小町さんは　逃げだした。

後日談としては、小町さんにドン引きをされ逃げられたのでしばらくの間小町さんはこっちに来ることがなく、その間は真面目に仕事をしたところ映姫様に褒められたらしく、しばらくの間眩しい笑顔の三途の川の渡しがいると評判になったそうな。

怪談レストランと花子さんが来たって今でも通じたらいいな

小町さんによって地獄の評判が高まった後、そのことで映姫様がさらに上の上司に褒められたらしい。そんなお互いに褒められ上機嫌な映姫様と小町さんの話し合いの結果、小町さんが仕事を人一倍こなしたならば映姫様がつま先立ちで頭をなでなですることが決まったらしい。小町さんが言うにはつま先立ちなのがポイント高いのだそうだ。分かるには分かるが明言は避けておこう。
でも赤面した映姫様の説教を受けてみたい気持ちもある。
そしてそんなゆるゆりな光景を見た周りも効率が上がっているらしい。おかげで全体の仕事が最適化され、共通の話題(映姫様可愛い)も出来たので交流も増え、それにより風通しが良くなり改革が起きてどんどん平和になっていってるとのことだ。地獄なのに。
とはいえ、小町さんは常に真面目になったわけではないらしく仕事を押し付けたり雑談をしに来たりすることもたまにある。それでもなお人一倍働いているらしいので流石映姫様ガチ勢だと思う。
そして俺も落ち着いてみると何をしてたんだと思う。これが鬼道の練習とかならまだしも念能力とか逸れすぎた発想に行ってるし、偶然が重なって暴走しちゃってたところがあった。なのでそのことを小町さんに謝ったところ
「別にあたいは気にしてないよ。いつも助けてもらってるしね」
と快く許してもらえた。こういうところがイケメンなんだよな。
そうして小町さんも前と比べて仕事をするようになったので、俺もそれなりに真面目に仕事をするようになっていたのだが、最近は別の客が来るようになった。
「こんにちは。今日はどんな変なことをしているの?」
そう聞いてくるのが八雲紫さんという人でなんでもスキマを使う力を持つ妖怪らしい。
それで、初対面のときに外道衆にそんな妖怪居たよなと考えていた

ところそれが顔に出ていたらしく、そのお詫びとしてたまに雑談しにくることになった。初対面の時から下半身を見たことないので幽霊かとも思ったけど違うらしい。

それで修行やこれまでのことを相談したら思いっきり笑われた後、弾幕の出し方を教えてくれた。なんでも鬼道はエネルギーを放出するものだから、先に小さい弾幕で慣れることが大事なのだそうだ。それでスペルカードを作るなどをして段階を踏んで進んだ方が上手くいくとのことだ。うさんくさいオーラと何故か上半身しか見せないことを除けばとても優秀な先生だと思う。

「その先生からの質問なのだけど、よくそのうさんくさいオーラを持つ人から教わる気になったわね」

そんなに細かく分かりやすく顔に出てるのか

今度、誰かに聞いて確かめてみるか

「それは単純にうさんくさい人って強そうだからですよ」

これに尽きる。

紫さんはとても美人なのもあるけど、漫画とかに出てくるうさんくさい奴らは後々凄いやつだったと明かされることがほとんどだ。浦原さんだってそんな感じだった。

そう考えていたらなんとも微妙な顔をされた。

その後なんやかんやあり、練習を重ね段階を踏み弾幕を出せるようになったがスペルカードで悩んでいたところ、実際に弾幕ごっこをすることになった。何でもイメージをつけるために実践するのが大事らしく、実戦と実践を掛けたダジャレなのかなとか考えたら睨まれた。

うん、やっぱり美人って何しても絵になると思う。

それだけじゃなく、ここのルールとしてこれから先弾幕ごっこをすることがあるかもしれないからやってみて慣れておくべきとのことだ。

流石に三途の川まで攻め込んでくる物好きなんていないとは思うが、用心するに越したことは無いので物は試しで紫さんとやってみる。

〜〜死神弾幕中〜〜
見せ場もなく負けた。
紫さん強すぎないか。
スペルカードもない初心者に負けるわけにはいかないとのことだが、それにしても弾幕の量が濃すぎると思う。よくもまあ、あんなにポンポンと出せるものだ。
あと、スペルカードで廃電車を出すのもスケールが違いすぎない？セーフなの？
紫さんの答えとしては、最低限避けることができるならそれはスペルカードとしてＯＫらしい。
それなら黒棺はどうなのか聞いてみたところ、下から発生しその後覆う感じなので速攻で逃げれば避けられるからＯＫとのことだ。何で紫さんがＯＫだと分かるのか謎だが、何でも弾幕ごっこに一家言あるらしい。そんな凄い人に教わるなんてとも思ったが、何でもあちらにもメリットがあるらしいので別に気にしなくても良いとのことだ。
一体メリットが何なのかも気になるがそれよりも、重大なことに気づいてしまった。
それは紫さんの正体だ。
一向に見せない下半身、それにスペルカードとしての電車、ここから導き出される答えはそうテケテケだ。
テケテケとは簡単に説明すると、電車に引かれ上半身と下半身が分かれた女の怪異で、失った下半身を求めて他人の下半身を奪ったり純粋に人間を殺したりするために活動している存在で妖怪なのかは不明だが妖怪なんて自己申告制みたいなものだから別に良いだろう。
一向に見せない下半身も存在しないちゃんとありますなら納得でき、廃電車をスペカとして使う理由も分かる。
三途の川に来た理由も失われた下半身を求めてかもしれないし、何よりもテケテケの対処法として「地獄に帰れ」というセリフがある。そうテケテケは地獄が住処なのだ。
なんだこれは、たまげたなぁ。
因みに時速１００ｋｍ以上の速さで走れて絶対に逃げられないと

いう説もあるらしい。
これらのことから紫さんはテケテケということになる。怪談だとでかいハサミを持っていたりひじで歩いたりするが、確か空中浮遊する奴もいるらしいので個体差の範疇であろう。少し後ろ向きな考えだが、紫さんが下半身を求めるならとっくに取られてると思うので個人的にはテケテケであろうと気にしないが、紫さんはきっと怖がられるのが心配だったのかもしれない。俺も前世持ちなのはおいそれと明かせないしね。
そのような深い悲しい過去が紫さんにあるとは知らなかったが、友人であるので必要以上に気にせず優しくしようと思った。
そんなことを考えていると、紫さんもまた冷たい視線を向けてきた。
美人の人って冷たい視線の使い手が多いのかな。

ＳＩＤＥ：八雲紫
最近妙な噂を耳にした。
何でもよく分からないことを言いつつ、
それでも仕事は真面目にこなす死神がいるとのことだ。
それくらいなら狂言回しの類と思って放置していたが、何で地獄の評判が良くなり改革が起こったこともその死神が遠因とのことだ。流石にそこまでの人物となると、幻想郷の管理者として会わない訳には行かないし、普通に興味が湧いた。そして話しかける前に観察してみて思ったのが歪な存在だということだ。きちんと輪廻転生した訳ではなさそうなのは勿論、この世界を漫画の世界だと勘違いをしていることだ。
一歩間違えると幻想郷の敵になっていたかもしれないが、別にこんな愉快な感じなら放置しても良いかしらね。
まぁひとまず会話をしてから考えますか。
とりあえず外道衆という存在があるのは分かっても初対面の女の子に外道衆かな？と考えるのは無いと思う。だけど半ばいちゃもんとはいえ会話の接点が出来たのは良かった。

会話を重ねて分かったこととしては、ＢＬＥＡＣＨという漫画に出てくる黒棺と呼ばれる呪術のようなもの(鬼道)を使いたいことと、そのための修行を何故か別作品のもので行なっていることだ。
何の理由で別作品の修行をするのかは分からないが、きっと事情があるのだろう。そしてあの地獄の改革について聞いたところ偶然によるものだと分かり、そしてその経緯を聞いてつい笑ってしまった。
笑ってしまったお詫びも兼ねてせっかくなので弾幕ごっこについて修行をつけることにした。
修行をつけてみると才能はともかくとして努力を自分の意思で続けているのは評価が高いところね。
恐らく数年後にあの子と戦うことになりそうだけどお互い良い経験になると思うしね。
ところでテケテケって何なのかしら？

過去編の平和とテスト前の勉強してないは信じない

休みの日になった。

これまでは休みが不定期だったのがこの前の改革により普通に休みの日が出来た。

小町さんの余波が止まることを知らないのが笑える。

それで休日の過ごし方を小町さんに相談したところ、地獄の外に出てみることにした。

なんでも、いくつかの注意点を守れば地上に出ても良いらしく、せっかくなので地上に初上陸しに行く。スペルカードはまだ完成してないが、そんなに弾幕ごっこはしないだろうから良いでしょ。それに知っているＢＬＥＡＣＨといくらかズレがあるから確認もしてみたい。

地上に出てみると、現代というより言ってしまえば昔っぽい、素朴な感じでどこか懐かしい雰囲気だ。

何が言いたいのかというと、過去編とかの回想で滅びたとか語られてたろう（偏見）普通に失礼

はるほどな、そういうことか。読めたぜ、完璧に。

きっと、紫さんが地獄篇のラスボスなのだろう。

うさんくさいしどことなくラスボスっぽい雰囲気してるし。

予想になるけどクインシーに攻め入られてここが滅んで力を付け復讐しに来るストーリーであろう。それで千年血戦篇後に復讐しに来るので既にユーハバッハ達は倒されてるから、生き残りのクインシーとして石田や一護を倒しに来る展開かな。

妖怪がいるのも、人気マンガ特有の映画版のあれこれじゃないかと思ってる。和風だから居てもあんまり違和感もないしね。

この予想がそうだとしたらいつクインシーが滅ぼしに来るのかが問題だ。これは予測がつかないし、ヒントも何もない。

それなら力をつけよう。いつクインシーが来るのかは想像もつかないけど、それでも力さえあればきっとどうにかなる。

黒棺をしたいのもあるけど、この日常を壊されたくないし、何よりもシリアスはあんまり好きじゃないから趣味と実益を兼ねた手段と言えよう。
とはいえ、今日は休暇なので気持ちを切り替えて散歩でもしてみるか。
歩いていたら、霧の湖に着いた。なんでも湖の先は危険で侵入禁止だから気を付けるべきとのことだ。
そんなに危険に飛び込びそうと思われてたのはショックだがそのおかげか危険な場所の情報が事前に手に入ったので安心して歩き回れる。霧の湖ってことは、ユクシーとかが住んでるのかな。この世界いろんな要素混ざりすぎでしょ。混ざってません
湖のほとりに着いたので釣りでもしようかな。
「おい、そこのお前。あたいと勝負しろ」
なんか女の子に戦いを挑まれた。
「チルノちゃん。ちゃんと言わなきゃ多分あの人に伝わってないよ」
「そっか、さっすが大ちゃんだな！」
「チルノちゃんもカッコいいよ」
そして別の女の子とイチャイチャし始めた。
これはどうするのが正解なんだろう。
挨拶していいのかね。
「ハッアセアセこんにちは私は大妖精といいます」
「あたいは、サイキョーの氷の妖精チルノだ。よろしくな」
やっと現実に戻ってきたっぽい。
こっちも自己紹介をしますかね。
「俺は鈴音　桜花。ここら辺に来るのは初めてなんだ。よろしくな」
「おうかか。よろしくな」
「よろしくお願いしますね。桜花さん」
この名は現在を満喫しろという意志を感じるんだよね。
言われなくてもするけど。
「それで、勝負って何をするんだ？」
「そうだった。あたいはサイキョーだから、それをたしかめたいんだ」

「チルノちゃんは弾幕ごっこをしてみたいんですよ。私は上手く出来ないので、通りがかった人を誘うことにしてみたんです」
　なるほどね。弾幕ごっこか。
「それならいっちょやりますか」
「お前、話が分かる良い奴だな。いくぞ」
「おう」
　そういえば、スペルカード作ってないの言うの忘れてたけど大丈夫だよな。
　～～弾幕中～～
「凍符「パーフェクトフリーズ」」
　やばい、チルノのスペカが激しすぎる。避けるのが精一杯でさっきから反撃に移れない。スペカを矢継ぎ早にしてくるから、終わった隙に賭けるのも難しそうだ。ひとまずこのスペカは凌ぎ切ったな。次はどうすっかな。
「えっと、桜花さんの勝ちですね」
「「えっ」」
「あの、弾幕ごっこってスペルカードを使い切ると負けなんですよ」
　初めて知ったわ。
　そして勝ったわ。
「お前中々やるな。だけどあたいは…」
「そんなことないよ。チルノちゃんも強かったよ」
「でもおうかはスペルカードを一つも使わなかったし攻撃も全然してこなかっただろ…」
　やばい、思いっきり勘違いされてる。それも罪悪感が湧く方に。
「そのことなんだけど、実はスペルカード持ってないんだよね」
「えっ、どういうことですか？」
　～～説明中～～
「つまり桜花さんは、スペルカードを持ってないのを言いそびれて、チルノちゃんに攻撃をしなかったのではなく、攻撃が出来なかったと」
「そう、チルノがサイキョーだから全然攻撃出来なかったんだよ」
「そうだよな。やっぱりあたいはサイキョーだ！」

よし、何とか機嫌が直った。
やっぱり笑顔が一番だよね。
「それで、スペルカードってどう作ればいいと思う？」
「「どうって？」」
「いや、スペルカードが上手く形に出来ないんだよね。チルノはどうやって作ってるの？」
「あたいはな、サイキョーだからサイキョーなんだ」
「チルノちゃんは、自分のイメージが大切って伝えたいんですよ」
そうか、イメージが足りなかったのか。
技がどうこうだけじゃなく、それを使う自分。
黒棺を使いたいのではない、黒棺を使う自分。
詠唱もカッコつけでしているのではなく、鬼道のイメージを補強するものだ。
確か本編にもそんなことがあったような気がする。（うろ覚え）
「なんだか分かって来た気がする」
「それは良かったな」
「チルノ、大妖精二人ともありがとな。そろそろ行くわ」
「こちらこそ桜花さん」
「またな、おうか」
またな、か。
さりげなく嬉しいこと言ってくれるね。
「おう、また会おうな。チルノ、大妖精」
よし、今日は最高の休日だな。
後日、黒棺を実際にしようとしたところ妖力の昂りを抑えきれず小爆発を起こし、映姫様から黒棺の禁止を言い渡された。